

肝不全に病める患児とその家族の思いに報いる

小林英司 慶応大学医学部臓器再生医学寄付講座

小児生体肝移植という新しい治療が定着するには、患児を思う計り知れない家族の思いと並々ならない医療者の努力が必要であった。2000年に全国に先駆けて自治医科大学において小児患児に特化してスタートしたプログラムであるが、初代移植外科教授の河原崎秀雄先生の患児への思いと努力は並々ならないものであった。さらに、このプログラムの誕生と継続が可能であったのは、2代目教授となった水田耕一先生の医療人としての強い意志があったからである。いま300の患児とその家族を支え18年の歳月がたったが、その歩みを思い出すにあたり、自治医科大学と東京大学医学部小児外科との縁を作ってくれた功績者として河原崎先生、水田先生、さらに関連する多くのスタッフにあらためて感謝申し上げたい。

プログラムは、外科学講座の永井秀雄教授、そしてドナー手術を担当した安田是和教授らのスタッフが大きく関与した。母体となる小児生体肝移植チームは、患児を担当し、一般消化器外科チームがドナーを、そして免疫抑制プロトコールなど臨床薬理学教室が関与した。もちろん、病棟で実際にドナーとなったご家族、そして移植を受けた患児を心身ともに支えてくれたコーディネーター、看護部の支えがなければプログラムは前に進むことができなかつたことは言うまでもない。



(立ち上げ当時の術前ミーティング写真)

一方、臨床プログラム開始当時、私は臓器移植の研究を主務としていたが、実は水田先生が臨床のプログラムがスタートする前の1997年に東大小児外科の第一号大学院生として私のところに来てくれ

ていた。続いて内田広夫先生（現：名古屋大学医学部小児外科 教授）、田原和典先生（現：国立成育医療センター 医長）、吉野治之先生（現：群馬大学教育学部 教授）、そして藤代 準先生（現：東京大学小児外科 准教授）と5名が連続して東京大学小児外科から大学院生として研究部に来てくれ、日夜研究を続け、そして臨床の生体肝移植では、私とともに動脈再建におけるマイクロサージャリーの手術に参加していた。



（小児生体肝移植時の肝動脈再建手術風景）

そして本プログラムは、最も予後が良い小児生体肝移植として世界に知られるまでになった。しかしその間に私自身のその後の生き方の転機があった。軌道に乗ってきた臨床の小児肝移植で、再移植、再々移植となる患児が出て、病院内ならびに関係する倫理委員会等で「生体ドナーに対する倫理性」が再度問われていた。私は2008年、臓器移植の倫理性を全世界に呼びかける「イスタンブール宣言」の代表となり、不法な海外への渡航移植への反対とともに生体ドナー保護を各国に求めていた。さらに2009年のNHKスペシャルで「人体製造—再生医療の衝撃」が報道されたとき、なぜ「ブタの体を借りてまでヒトの肝臓が作りたいか？」という番組が表となった。患児のドナーとなる家族の思いは、患児を心配するだけでなく、自分自身もある意味患者となる。そしてこの無理のある治療しか選べない現実の中で、医療者としての最善を尽くそうとする自治医科が医学移植チームを通じて、「移植臓器を造る」という思いが確固となり、大学の枠を超え研究環境を求めて動いていった。

「患者は教科書」とよく言われるが、生体肝移植は、患者とその家族が我々医療者に多くのことを教えてくれた。自治医科大学移植外科の歴史は、私にとって時代を切り開く新しい医療が、自治医大においていかに展開したかをあらためて教えてくれる。